中国語海外語学研修と国際交流

舛谷　　鋭
幸田麻里子

中国語教育研究室では，1992年から中国での語学研修を行って来た。2000年度より英語海外文化研修プログラムに次いで，全カリ自由選択科目として募集を行うことになった。修得できる単位は２単位で，各学部の規定により卒業単位としても認められる。

本学における中国での語学研修は，研究室の自主プログラムとして開始された。過去の実施状況については表１の通りである。４月中の出願書類提出期間終了時に履修希望者が15名を下回る場合には中止されるが，ここ４年間は50名前後の参加者が集まっている。

事前研修

現地に赴く前に二回に渡って事前研修が行われる。そのうち一回は科目登録直後の５月初旬に行われ，復旦大学に提出する申請書の記入やコースの概要説明，健康状態のアンケートなどに費やされる。二回目の事前研修は渡航直前の7月初旬に行われ，初級，中級クラスに分かれて本学の中国人専任，嘱託教員が模擬授業を行う。中国語だけのダイレクトメソッドの授業は国内でも不可能ではないが，日本にいるほとんどのネイティブスピーカーは日本語を解するので，特に初級クラスでは意志疎通が困難なので，中国語に徹したクラス運営は簡単ではない。そのため，ほとんどの学生にとって事前研修での授業が，中国語で中国語を教えられるはじめての経験で戸惑いも多く見られる。少なくとも中国語による指示などの教授用語には反応できるようにさせたいものだ。なぜなら実際の研修では留学生専門の教員とはいえ，英語はともかく日本語を流暢に話す先生は稀で，クラス運営は簡単な中国語だけで繰り返し行われるからだ。そして，こうした過程が助けなしの中国語によるコミュニケーションの第一歩となるのである。

対外漢語教学とHSK

海外語学研修は現地側から見れば「対外漢語（=中国語）教学」に当たるが，中華人民共和国では1951年に東欧からの33名の交換留学生を清華大学が受け入れたのを嚆矢とする。その後桂林でのベトナム人留学生の受入（1954年），北京大学での朝鮮人留学生の受入（1957年）が行われ，1956年には廈門

大学に華僑向けの通信教育部が，1960年には北京外国語学院（現北京外国語大学）にアフリカ人留学生事務室が開設された。1962年には北京外国語学院外国人留学生事務室と出国留学生部が独立して外国留学生高等準備学校が設立され，1964年に北京語言学院（現北京語言文化大学）と改称される。1966年以降，文化大革命によって対外交流事業のほとんどは中止され，語言学院も北京第二外国語学院に合併される（1971年）。しかし中国の国連参加（1971年），日中国交正常化（1972年）などの国際舞台への復帰に伴い，国家間の交換留学生が1972年の北方交通大学へのアフリカ人留学生受入を皮切りに再開される。1973年には語言学院が復活し，対外漢語教学専門の編集研究部が設けられる。また，文革後の1980年には語言学院で４週から16週の短期中国語研修が開始され，旅行見学の一種として全中国の大学に波及する。日本を含む西側諸国でも，この時期に中国への留学が開始され，日本でもサマースクールに当たる「短期留学」専門業者が生まれるなどして盛んになる。日本人留学生は1989年の天安門事件で一時減少した他，90年代に韓国人留学生が急増するまでは，外国人留学生全体で圧倒的なマジョリティとなる。

対外漢語教学についての研究活動は中国教育学会に対外漢語教学研究会が設けられ（1983年），中国対外漢語教学学会として独立し（1988年），国際漢語教学シンポジウムなどを主催している。1989年には語言学院に世界漢語教学交流センターが設けられ，漢語水平考試を事業の一部として行っていたが，その後漢語水平考試センターとして独立する。〔呂必松『対外漢語教学発展概要』北京語言学院出版社，1990〕

一方教員については，国家教育委員会対外漢語教師資格審査委員会が1995年に『国家対外漢語教師資格考試大綱』を発表し，1998年以降，この試験か普通話（標準語）水平測試センターの２級甲以上の証書を持たなければ外国人に中国語を教えることができなくなった。〔国家教育委員会対外漢語教師資格審査委員会編『国家対外漢語教師資格考試大綱』外語教学与研究出版社，1998〕

前記の漢語水平考試（HSK）は1995年から中国の大学に正規入学する留学生に必須の，いわば中国語版TOEFLとなり，『漢語水平等級標準和等級大綱』（1988）と『漢語水平考試大綱』（1989）に依拠し，１．母国での既習者が留学によってどのくらい成果を得たか，２．外国人が中国の大学に入学するための中国語能力の基準，３．中国への語学留学１－２年後の到達度確認，４．一定の中国語力を持つ外国人や華僑が語学力証明（漢語水平証書）を得るための基準，５．漢族以外の中国少数民族の学生が大学に入るための中国語能力の基準，などを判定対象としている。HSKの検討は国家教育委員会の委託で前記の北京語言学院が1984年に開始し，現在は教育部の国家漢語水平考試セン

ターが実施し，実務を語言大学のHSKセンターが行っている。〔劉鎌力主編『漢語水平測試研究』北京語言文化大学，1997〕日本でも古川裕『HSK対策３－５級』（アルク，1998）のような解説書が出版され始めたところだ。

復旦大学と国際文化交流学院

ここ数年本学の語学研修の受入先となっている復旦大学は，北京大学と並ぶ中国の名門校で，1974年から留学生を受け入れ，12,000人の中国人学生の他，毎年700名以上の長期留学生と600名以上の短期留学生が在籍するマンモス校である。1985年から海外の大学との提携を開始し，1987年には国際センターに当たる国際文化交流学院が設立され，学部，大学院留学生の事務全般を任い学院内に中国語学習コースと学士号を取得できる中国言語文化学科を持っている。留学生の７割は学院内コースで学んでおり，本科生（４年），修士課程（３年），博士課程（３年）の他，留学生コースだけでなく中国人学生と一緒に本科の授業を聴講できる普通進修生（半年から２年），大学院研究生に当たる高級進修生（半年から１年）や学院内のコースで中国語を集中して学ぶ漢語進修生（半年から２年）などがある。

本学からの長期派遣留学生も学部生はほとんどの場合，漢語進修生扱いとなるが，たとえば復旦大学では理系と留学生向けの中国言語文化学科はHSK３級，文系はHSK６級の中国語力が要求水準として掲げられている。他の中国の大学も同様の基準で受入を行っていることから，日本でHSK６級証書を取っておけば，留学先で留学生コースだけでなく本科の授業を受講することも可能となるだろう。なお，漢語，普通進修生が２月と９月に入学できる以外は，中国の大学の新学期は９月に統一されている。海外語学研修のような短期留学は，主にサマースクールとして行われ，２から４週間程度の週末旅行を交えたコースで，中国語の他，方言，文化などを学ぶこともできるようだ。

クラス分けから授業まで

現地でのクラス分けは履修登録時に別科目である初級，中級に分かれ，基本的には初級１～２クラス，中級２～３クラスの計４クラス程度だが，開講時に行われるクラス分け試験によって中級クラス希望者が初級クラスに入ったり，初級クラス希望者が中級クラスに入れられることがある。この場合，中国人教員が着目しているのは主にコミュニケーション能力である。日本人の学生は４技能のうち読み書きに偏る傾向があるが，中国の外国語教育は聞く話すに重点をおいており，本学の全カリ以降のコミュニカティブな語学教育が試される場でもある。なお，参加クラスに関わらず，立教での評価は登録時のコースで行っている。海外語学研修では立教生のみでクラス編成しているが，飛び抜けた学生がいた場合，世界中からの個人参加者で構成され，レベル別クラス数の多い国際班に参加させることもある。

クラス分けによって各クラスは10名前後となり，朝８時から11時半まで，二人の中国人教員が各２コマずつ計４コマの授業が行われる。教材は国際文化交流学院が編集・出版した外国人向けの教材である『新編漢語速成教材　６巻』（復旦大学出版社）を，レベルによって履修内容を調節して使用している。中級クラス以上では日本の１年分の量の教材を一冊終えることになる。授業を担当する教員はいずれも前記の国家対外漢語教師資格を持った専門家が当たっている。このように語学研修では午前中45分４コマで，月から金の５日間で一週20コマが標準だが，他大学では留学生用に一週24コマの集中コースを設けているところもあるようだ。

課外活動・旅行と修了試験

授業を終え，日本より早めの昼食後，午後は学内で複数回に渡る中国語の歌の練習や太極拳，単発の伝統劇，民族音楽，書画などの文化講座が開かれる。夜は一部文化講座と連動し，伝統劇，雑技（サーカス）鑑賞などの見学コースが用意されている。こうした国際文化交流学院が用意する留学生全体の課外活動の他，立教生向けには『大地の子』の舞台となった宝山鉄鋼所見学などが行われ，限られた時間の中で様々な体験学習を実現しようと工夫を重ねている。

語学研修３週間のうち３回の週末は，一回は周荘など近郊への日帰り見学に，もう一回は自由行動に当て，残りの一回を週末旅行という形で蘇州，無錫，杭州などの江南の古都巡りに当てていた。しかしこうしたお仕着せの小旅行に対する学生の関心は今一つで，自由行動の希望も多く，今後は週末旅行は研修に組み入れることはせず，復旦大学が短期留学生向けに用意している現地払いの週末旅行プログラムに自由参加させるなど，学生が自分の意志で参加し，関心を持続させるやり方を検討したい。

最終週には中国人教職員を交えた成果報告会が行われ，学生による歌や寸劇などが司会進行も含めて中国語で披露される。その後のクラス修了時の口頭試問では，初級クラスの学生も中国人教員の質問に半分以上反応できるようになっている。

その後北京旅行となるが，上海からの移動は実践学習のきっかけとなるよう，中国人と一緒の二等寝台列車を利用している。最後の北京旅行は語学研修で培った標準語の力を存分に活用する機会で，万里の長城見学なども含めつつ，自由行動を主として構成している。特に天安門広場の人民英雄記念碑前に現地集合する日は，数十名の学生がそれぞれ何とか指定時間までにたどりつき，その後の集合写真撮影は教員学生ともども格別の感慨がある。

こうした研修の日本における成績評価は，授業修了時の達成度テストによる評定を中心に事前研修，現地研修全体への参加状況を加味して行われる。なお，日本の大学における中国短期研修の単位認定状況だが，桜美林大学で

東北師範大学４週間を４単位，二松学舎大学で北京大学歴史学部３週間を４単位に認定している例がある。22.5時間=１単位換算という定式にあてはめても，立教の語学研修の３週間２単位は甘くはないことがご理解いただけるだろう。長期留学では，桜美林大学などで１年間を一律20単位程度で認定しているところもあるようだ。

日常生活と異文化体験

復旦大学には留学生宿舎地域があるが，短い滞在で中国人の日常に触れることができるよう，ここ数年メインキャンパスの東側の中国人生活区にある大学の招待所を利用している。原則としてツインルーム１部屋に２人で入り，準ホテルなので一定周期で掃除やベッドメイキングもあり，留学生宿舎に比べると室内にバスルームやクーラーがあるなど比較的設備が整っている。館内には立教生専用の洗濯機二台を設置し，学生たちは部屋ごとに利用時間を割り振って使っている。食事は隣接する教職員食堂などで各自摂ることになるが，周辺の路地では軽食から両替，文具，書籍にインターネットカフェまで，必要なものがほとんど手に入るし，最近は宿舎の近くにコンビニもできた。

中国は日本と逆で「人は左，車は右」だから，「左見て右見て」道を渡らねばならない。車優先と相まって日本人はなかなか違和感が抜けないものだが，幸いにして今日まで大きな交通事故は起きてない。また2001年現在，１中国元15円換算の世界を体験する学生たちは，たとえば1980年代の１中国元100円時代とは感覚が違うはずだ。そこで当初は金銭感覚について場を乱さないよう注意するが，ほとんどの学生は帰国までの数週間で100元（約1500円）を大金と感じるようになり，その順応性に驚くことがあった。

こうした中国での研修期間中，学生はかなり強烈な異文化体験をするが，後に掲げる調査の通り，中国嫌いになる学生は稀で，学習効果は研修期間中よりもむしろ帰国後に顕著であり，参加した学生は例外なく強い学習意欲を持つようになる。また，そうした学生が立教の中国語クラスに何名かずついることによる波及効果も少なくない。語学研修参加者は，一歩進んで協定校などへの長期派遣留学を目指す学生が多いことも特筆される。

一方，二回目の事前研修では健康状況調査として　１．薬を飲んで具合が悪くなったことがあるか，２．アレルギー疾患があるか，３．その他体調について，というアンケートを取っているが，その結果半数近い学生がアレルギー性の疾患を自覚しており，現地での通院時はもちろん，日常の食事についても注意を要する。こうした状況に対応するため，大学の科目となった2000年度からは，中国語科目担当者の他，生活面でのアドバイザーとして中国語が話せる日本人女性コーディネーターが同行することとなった。特に女性としたのは，研修参加者の過半数が女性であるためで，こうした傾向は本

学に限らず，中国短期留学，あるいは海外サマースクールに共通するもののようだ。

国際交流とイメージ

海外語学研修では，従来帰国時に記述式のアンケートを課していたが，引率者の印象や現地でのヒアリングと重なる点も多く，列挙する以外にまとめて傾向をはっきりさせるのも難しかった。一定の質問票を用いて，研修前，研修後に回収する方法を取れば，国際交流とイメージに関する調査として他の事例との比較も容易である。

そこで今回は国際交流とイメージについての調査を渡航前が第二回事前研修時，渡航後は帰国後に郵送で行った。参加者の属性は表２の通りである。調査は共通な項目として中国人に対するイメージを問うもの（表３），事前調査項目として中国に対する知識，中国語学習，研修参加理由などを問うもの（表４），事後調査項目として研修参加の満足度，再訪希望を問うもの（表５）がある。

結果はそれぞれ別表の通りである。事後調査の回収率は高くはないが，事前調査と比べて中国人に対するイメージの明確化によるポイントの向上が見られる。また，満足度と再訪希望についても高いポイントを得た。今後は毎年の研修で調査を継続し，データを蓄積して行きたい。

本稿は研修の実施状況を科目担当者の舛谷が，国際交流に関する調査，分析は本研修を調査対象として数年来かかわっている幸田が主に執筆した。なお，他の事例との比較については幸田によりまとめられる予定である。

（ますたに　さとし　本学社会学部講師
全カリ運営センター　中国語教育研究室
こうだ　まりこ　本学観光学研究科）

表1. 立教大学おける中国語海外語学研修実施状況

年度	研修先	主催	引率	研修期間	参加者	男	女	1年	2年	3年	4年	他
92	山西大学	研究室	専任1	研修3週間＋旅行5日間	29	8	21	9	7	9	4	
93	山西大学	研究室	専任1（現地）	研修3週間＋旅行5日間	23	5	18	4	11	5	3	
94	山西大学	研究室	なし	研修3週間＋旅行5日間	29	7	22	4	13	8	2	2
95	山西大学	旅行社	院生	研修3週間＋旅行5日間	データなし							
96	復旦大学	研究室	専任1	研修3週間＋旅行5日間	データなし							
97	復旦大学	研究室	専任3	研修3週間＋旅行5日間	52	19	33	21	17	9	4	1
98	復旦大学	研究室	専任1	旅行5日間＋研修3週間	54	10	44	9	26	13	6	
99	復旦大学	研究室	専任2	研修3週間＋旅行5日間	55	9	46	7	44	3	1	
2000	復旦大学	大学	専任2+添乗1	研修3週間＋旅行5日間	44	13	31	2	35	7	0	

表2. 2000年度中国語海外語学研修参加者の属性（単位：人，カッコ内は%）

		事前		事後	
性別	男性	10	(24.4)	12	(33.3)
	女性	31	(75.6)	24	(66.7)
学年	1	1	(2.4)	34	(94.4)
	2	33	(80.5)	1	(2.8)
	3	7	(17.1)	1	(2.8)
年令	18			15	(41.7)
	19	18	(43.9)	16	(44.4)
	20	18	(43.9)	4	(11.1)
	21	4	(9.8)		
	22	1	(2.4)		
	無回答			1	(2.8)
学科	英米文	3	(7.3)		
	日文	4	(9.8)	3	(13.0)
	教育	1	(2.4)	1	(4.3)
	心理			1	(4.3)
	史	8	(19.5)	4	(17.4)
	経済	4	(9.8)	3	(13.0)
	経営	5	(12.2)	2	(8.7)
	社会	2	(4.9)	2	(8.7)
	産関	2	(4.9)	1	(4.3)
	法	1	(2.4)		
	国比	1	(2.4)		
	ｺﾐ福	3	(7.3)	2	(8.7)
	観光	7	(17.1)	4	(17.4)
海外旅行経験	経験なし	21	(51.2)		
	1回	8	(19.5)		
	2回	3	(7.3)		
	3回	2	(4.9)		
	4回	1	(2.4)		
	5回	2	(4.9)		
	10回以上	3	(7.3)		
	無回答	1	(2.4)		

表3. 中国人に対するイメージ

1← 3 →5	事前	事後
積極的－消極的	1.56	1.65
冷淡な－情が厚い	3.66	3.96
男女平等な－男女差別的な	3.51	2.74
いい加減な－信頼できる	2.88	2.39
怠け者な－勤勉な	3.71	3.39
日本人と似ている－似てない	3.41	3.26
伝統的－近代的	1.76	2.55
頑固な－融通が利く	2.07	2.70
好戦的－平和主義	2.59	2.35
礼儀正しい－無礼な	2.15	3.13
無学な－知的な	3.80	3.39
緊張感-解放感	2.83	3.57

表4. 事前調査項目と結果

知識（正答率）	正式国名	70.7	
	首都	97.6	
	面積	39.0	
	澳門が返還された国名	51.2	
	日中国交正常化年	46.3	
	国家主席の名前	75.6	
	輸入品	19.5	
	中国に関して正しい情報	9.8	
学習理由（%）	中国に関心・興味があったから	65.9	
	将来，役に立つと思ったから	22.0	
	他の外国語より	0.0	
	その他	2.4	
	無回答	9.8	
参加理由（人）	中国語がうまくなりたい	15	(36.6)
	中国での生活を体験したい	10	(24.4)
	中国の文化に接してみたい	14	(34.1)
	その他	1	(2.4)
	無回答	1	(2.4)

表5. 事後調査項目と結果（単位：人，カッコ内は%）

満足度	非常に満足している	14	(60.9)
	満足している	7	(30.4)
	あまり満足していない	0	
	満足していない	0	
	無回答	2	(8.7)
満足理由	中国語能力が向上した	16	(69.6)
	中国文化を体験できた	21	(91.3)
	中国人と交流できた	20	(87.0)
	中国に関する知識を得られた	15	(65.2)
	新しい体験ができた	21	(91.3)
	その他	5	(21.7)
再訪希望	時間やお金に融通をつけても行きたい	14	(60.9)
	時間やお金があれば行ってみたい	9	(39.1)
	個人的にはあまり行きたくない	0	
	行きたくない	0	